

## 入選

### 親切が積もれば

宮城県 仙台二華中学校

2年 齋藤四季

この作文コンクールのテーマを見て、最初に思い浮かんだのは、母に言われた言葉だ。

「少しでいいから、周りを見なさい。家のことが、どうやってまわっているかがわかるから。」

中学1年生の夏休みに、母から大きな説教を食らってしまったときに言われた言葉で、母がいつもと違って静かに怒っていたため、今でもはっきりと覚えている。

正直なところ、去年の夏休みの私は、家族の一員として何の役割も果たしていなかった。部活と塾、友達との予定以外は家にいて、スマホをいじるか寝るという生活だった。つまり、お手伝いのおの字もない夏休みを過ごしていた。

そんな私に、堪忍袋の緒が切れた母が1週間、私に一切関わらないと宣言し、私はその期間中、自分のことをすべて自分でやらなければいけなくなった。最初は、1週間くらいならがんばれば今までと同じような生活ができると思っていた。しかし、実際に生活してみるとかなり大変で、とても疲れた1週間になった。

この体験から、私1人だけでできることは本当に限られているということを実感した。いつも、特に何もしなくてもご飯がでてきて、洗濯された服を着られて、習い事には迎えの車が来るという生活は当たり前ではない。文章で書くとても簡単なことだが、私はそのことに気づくのに12年もかかってしまった。毎年、母の日や父の日に感謝を伝えていたが、一体私は何に対しての気持ちを述べていたのか。

当たり前ではない生活のありがたみに気づき、そのことを母に伝えると、母から、

「その生活は、誰かの善意で成り立っているんだよ。いつまで受け身なの。四季に家族として、人として善意からくる行動はないの。」と言われた。

私が7日間、自分のためにやって疲れたと感じたことの多くは、ふだん私の親が善意でやってくれていることだ。『塵も積もれば山となる』ということわざがあるが、小さな親切が積もれば何倍、何十倍にもありがたいものになった。一つひとつは小さな親切で、ふだんありがたみを感じにくくても、小さな善意に常に感謝の気持ちを持って、相手に伝えることが大切だと思った。

そして、手伝ってあげたい、助けたいと思ってもらえる人になるためには、相手への善意や日頃の行いも大切なのではないだろうか。善意は、人から人への感情である。私も相手への気持ちを行動に移し、善意を親切として行動しなければ、私を応援したいと思ってくれる人に申し訳ない。

去年の7日間のおかげで、親子という関係だからこそ感じていなかった親切のありがたさに気づくことができた。誰かからの親切は当たり前ではないことを忘れずに、誰かに当たり前に親切な行動ができるような人になりたい。